

本書は3名の研究者による共同研究の成果として上梓されました。研究への着手は2008年初秋、「若者の海外旅行離れ」を取り沙汰され始めて1年経つか経たないかといった頃のことです。観光行動論の研究者であり海外旅行が大好きな私たちは「若者は海外をめざすもの」という固定観念をもっていたので、「海外旅行をしない若者ってなんなのだろう?」という素朴な疑問から研究がスタートしました。

しかし共同研究の種は、さらにそこから遡ること4年前の2004年夏に蒔かれていました。Asia Pacific Tourism Association (APTA) の年次大会が初めて日本で開催されたときのことです(於・長崎国際大学)。このとき共著者の3名が初めてそろって顔を合わせました。同じ分野の研究者であったこと、海外の研究動向に強い関心を抱いていたこと、また当時駆け出しの研究者であり年齢も若かった(中村と西村は当時31歳、高井は9歳上だったけれど研究者としてのキャリアは同じくらいだった)ことなど、いくつかの共通点のある3名は学会後の飲み会で研究について大いに語り合い、酔いの勢いもあったせいか「いつか共同研究しましょう!」と期限のない約束のようなものでした。

そんな下敷きがあったおかげでしょう。2008年9月に高井が中村を東京駅前・丸ノ内ホテルのカフェに呼び出して「若者の海外旅行離れの研究しない?」と、ほぼ思いつきの段階で声をかけた翌週には試験的な調査票の原稿が出来上がっていました。1週間遅れで参戦した西村が調査票にツッコミを入れ、調査票をつくり直し、各自の勤務校での調査を実施、そこから11月の学会報告をめざして分析と執筆が怒濤のように行われました。長野大学で開催されたその年の日本観光研究学会での報告がこの共同研究——通称「ワカタビ」——の初めての成果報告です。この、まず高めの目標を掲げて作業にのめりこみ、途中で「ちゃぶ台ひっくり返し」(西村担当)があり、最後は兎にも角にもどうにか帳尻を合わせる。この体育会系パターンはその後今日に至るまでワカタビのプロトコルになりました。

もうひとつ、私たちが拠り所としてきたこととして、各自の得意分野を生か

して分担作業することにより効果と効率を上げていく、けれど全員の合意が必要な場面では徹底して議論を尽くす、ダメ出しは躊躇なく行う、といった作法があります。同じ分野の研究者だからこそ、また同じ志——日本の観光研究の質向上をめざしたい——をもつ者同士だからこそ、妥協せず厳しく批判し合い、そこから確かな知見を築きたいという姿勢は、ワカタビが完全にフラットな組織だからできること、それが私たちの矜持でもあります。

本書が出版された2014年は、1964年の日本人海外旅行の自由化からちょうど半世紀の節目にあたります。記念すべきこの年に、着手から丸6年経ったワカタビ研究のひとまずの成果を世に送り出すことができました。「なんとなくの勢い」で始まった研究でしたが、いつしかワカタビがめざすものは、現代日本の「若者の海外旅行離れ」という特定の現象の解明にとどまらず、観光行動論の理論構築をも視野に入れたものになっていました。観光研究、トラベル・ビジネスなどに関心のある多くの皆様に読んでいただき、ご感想・ご批判を頂戴できますと大変うれしく思います。

「池に小石を投げ込んで水面に波紋を描くような研究にしたい」。そういえば、実はワカタビの結成当初まもなくの頃から、そんな野望を語り合っていたことを今思い出したところです。

本書を構成する各章の内容の初出は以下のとおりです。本書の趣旨にあわせて、内容の大幅な再構成や加筆・修正等を行っています。

第2章、第5章、第8章、第12章、終章、すべてのコラム……書き下ろし
序章・第6章・第7章……高井典子（2014）「当事者の声から読み解く“日本の若者の海外旅行離れ”を巡る諸概念：観光行動研究×質的研究アプローチ」『文教大学国際学部紀要』25（1），53-81

第1章……中村哲・高井典子・西村幸子（2009）「海外旅行の阻害要因に対する大学生の意識」『経済文化研究所紀要（敬愛大学）』14，239-294；西村幸子・高井典子・中村哲（2010）「『若者の海外旅行離れ』現象への理論的アプローチの可能性」『同志社商学』62（3・4），78-96

第3章・第9章……中村哲（2014）「海外旅行の阻害要因の実証分析：日本

の“若者の海外旅行離れ”を対象として』『玉川大学観光学部紀要』1, 1-22

第4章……西村幸子（2010）「日本人大学生による海外旅行経験の経年変化（1991年－2005年）：全国大学生活協同組合連合会『学生の消費生活に関する実態調査』個票データの分析」『同志社商学』62（3・4），57-78

第10章・第11章……西村幸子・高井典子・中村哲（2014）「海外旅行の実施頻度に関する動態的循環モデル：若者の海外旅行離れ『論』への試み」『同志社商学』65（4），35-61

本書の執筆分担は以下のとおりです。なお、終章は〔共同執筆〕となっています。

中村哲……第1章，第2章，第3章，第5章，第9章，第12章，終章，
Column③，④，⑤，⑦，⑧，《本書で紹介する調査データについて》

西村幸子……第4章，第8章，第10章，第11章，終章，*Column②*，⑥
高井典子……序章，第6章，第7章，終章，*Column①*

なお、本書は科学研究費補助金（基盤研究（C））による助成を受けた研究課題「日本の若年層における海外旅行阻害要因：その構造と認知変化」（課題番号22530454）の成果の一部です。また、第4章での分析にあたり、東京大学社会科学研究所付属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「学生の消費生活に関する実態調査（全国大学生活協同組合連合会）」の個票データの提供を受けました。ここに記して関係の皆様に御礼を申し上げます。

最後になりましたが、本書の編集を担当してくださった法律文化社の上田哲平氏には大変お世話になりました。上田氏の伴走がなければ本書の完成はまだ先になったことでしょう。心より感謝申し上げます。

2014年10月

中村哲・西村幸子・高井典子